

# 「新しい舞踊」論における リズム概念の意義

大阪大学大学院 古後奈緒子

19世紀末期以降ヨーロッパにおいて、「リズム」は様々な分野に表れ、この時代に登場した新しい舞踊芸術を論じる際にも頻繁に用いられた概念の一つである。したがって、リズム概念を鍵に舞踊論を読み解くことで、舞踊に投影された時代の理念が明らかになると考えられる。このような問題意識を出発点として、1900年以降にドイツ語圏で発表された舞踊に関するマニフェスト、理論、批評などにおけるリズムの語用を確認する作業を行った。その結果、当時リズム概念が一義的に用いられていたわけではなく、多様な外延と内包を備えていたこと、さらに、多義性を問題視して行われた定義付けの試みが、メソッド開発、舞台舞踊制作の実践に具体的な影響をおよぼしていたことが明らかになった。発表では、ジャック＝ダルクローズのリズム教育論、ヴィーゼンタール周辺の舞踊言説、第一次大戦後のドイツのモダンダンス論という三つの言説空間に例をとり、その中でリズム概念が果たした役割をそれぞれの含意とともにまとめた。三つの言説空間におけるリズム概念は、以下のように説明され、相互に関係づけられる。

まず、リズムの定義付への要請は、同時代を様々な危機とともに認識する時代精神において、この概念が相矛盾する二つの語義を備えていたことから起こったとすることができる。この時代（に認識された危機とは）、ルネッサンスに端を発する近代の合理主義の帰結として、人間が自然や共同体から乖離してしまったこととまとめられる。リズムは人間の身体に備わる自然であり、諸々の乖離を調和的な統合へと導く媒介的な手段とみなされた。一方音楽芸術の慣習においては、合理主義的な還元の結果、リズムは規則的な拍子と同一視されていた。リズムを音楽教育に役立てようとしたジャック＝ダルクローズは、前者の問題意識に立ち身体運動のリズムを称揚する一方で、音楽の慣習にとらわれ、リズムを後者の意味での拍子から解放しえなかった。

これに対し、世紀末の文芸サークルと第一次大戦後のドイツにおける舞踊論は、リズムと拍子の区別を通して、音楽への従属からの解放という実践を導いたと捉えられる。

まず、ビイは、リズムを主観における生の現象と客観的な記号とに区別し、自然の生動に主観的に感受されるリズムを舞踊創作の原点におくべきだと唱えた。一方でホーフマンスタールは、時間

持続の切断面、すなわち「瞬間」に表れる身体運動の象徴作用によって、人間存在が時空を超えた反復のうちに認識されるという壮大なリズム観をうちだした。両者のリズムの捉え方から創作の指針を得、舞踊創作を既成音楽から解放するかたちで発展させたのがヴィーゼンタールである。

次に、ドイツの身体文化、モダンダンス運動において、第一次大戦以降さかんになったダルクローズ批判が注目される。その中で、ドイツ全土にわたる組織化を展開したボーデは、クラークスに論理的支柱を得てダルクローズの態度を批判し、音楽を全面否定して身体のリズムに沿う独自のリズム体操メソッドを確立した。一方でブランデンブルグは、ラバン派への発展段階にダルクローズを置き、身体運動の自立した発展可能性をそこに見る。一方で、教育と舞台創作の実践において、リズムが再び既成の音楽作品に還元される点を批判する。彼の論はさらに、身体運動を造形性を中心として芸術的に発展させる可能性を示唆している。そこには、音楽のくびきから解放された空間芸術として舞踊を自立させようとしたモダンダンスの綱領との一致を認めることができる。

以上の論点を整理すると、発表で取り上げた様々なリズム論、あるいはリズムの語用は、リズムの救済という試みにおいて一つの基本線を描き出す。まず、リズムの救済という問題意識を具体的に準備したのが、ダルクローズである。世紀末以降のモダニズムの意識形成の中で、かたや多くの社会的要請を担ったリズムが出現し、かたや音楽タームとしてのリズム（拍子）が存在していた。両者は時代のコンテクストの中で相反する性格を持ち、音楽の領域で一つのものとなる時、自ずと新しいリズムが伝統的なリズムに従う関係にあった。このことを図らずも顕在化させたのがダルクローズであり、モダンダンスの展開はその意識的な乗り越えとして導き出されたと捉えられる。モダンダンスは身体のリズム能力の開発という軸をダルクローズに得ながらも、リズムの救済のために音楽作品への従属から抜けだそうとする。その際、リズムと拍子の切り離しという主題が、実践を率いる理念や作業仮説となったと捉えられる。二つのダルクローズ批判においては、遍在するリズムは、自然の生動から脱時間へと向かう外向きの線を描くと同時に、身体に備わる秩序に向かって内へと沈潜する。この二つの軌跡が具体的に示されたことで、音楽からの解放というモダンダンスの綱領の内実の一部が明らかにされ、同時に、散在する個々の取り組みが舞踊史的に関係づけられたと考える。